九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

小高句麗國の滅亡（三）

日野，開三郎

https://doi.org/10.15017/2244130

出版情報：史淵. 101, pp.13-37, 1969-11-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

小高句麗國の滅亡 (三)

日野開三郎

第四節　小高句麗国滅亡過程に於ける渤海国の行動

安禄山の亂の勃發より小高句麗國の滅亡した神冊三年(中國の後梁・貞明四年)まで(七五五〜九一八)を通算するに、足かけ百六十四年となる。渤海國は安禄山の亂の勃發直後に小高句麗に兵を入れ、此れを藩屬國として專隷せしめ、此の關係は小高句麗國の滅亡する寸前まで續いてゐたのであるから、渤海國は實に百六十餘年の久しい間、小高句麗に對して宗主權を振つてゐたことになる、然も此の宗主權は極めて強大で、殆んど此れを直轄領と同樣に支配してゐたと推定せられる。此の樣な宗主權を有つ渤海國が、小高句麗の滅亡過程に於いて、宗主權に伴う庇護の責任をどの樣に果してゐたか。その對策的行動を追究することは小高句麗國滅亡の眞相をつきとめる上に必要不可缺であり、又渤・丹兩國の興亡過程を明かにする上からも極めて重要な課題である。以下、此の問題に就いて考察する。

第一項　渤海國の宗主權と小高句麗國を指す「渤海」の行用

小高句麗國は、大高句麗に比すれば遥かに弱小の國家であつたが、その領土は遼河流域以東鴨緑江口に至り、北は今の開元を越えて懐德に達する廣大な地域に跨り、建國以來二百數十年の長い命脈を保つた歴とした一國であつた。此の小高句麗を滅したのは契丹である。然るに遼史は此の小高句麗國の討滅に就いて記する所無く、如何に簡略を以て知られる遼史とはいへ、その討滅した國名を全編中のどこにも書きとめないことに多大の不審を抱かせる。又小高句麗國の滅亡は東亜の一大事件として必ずや中國に傳聞せられたであらうと思はれるに拘らず、中國の史書にもそれを書きとめたものがな

く、やはり大きな不審を抱かせる。たとへ中國が唐末五代初の亂離の時世であつたにしても、東北程遠からぬ地の大事件が全く傳へられなかつたとは思はれない。此の樣に考へて尚仔細に史料を檢討するに、小高句麗國の滅亡過程に於けるその消息が契丹・中國何れの史書にも見えてゐないわけではないことが知られる。

遼史の本紀や屬國表に高麗の稱を以て小高句麗の入貢がその所傳を殘してゐることは、先に指摘考證した所である。更に此所に注意すべきは、此の國の消息が渤海の名の下に扱はれてゐることで、それは契丹・中國双方の史書に共通して見られる所である。その遼史に見える若干例は既に先に擧示したが、尚類例は少く無く、後文に中國側の例と共に補足するつもりである。小高句麗が渤海の名の下に扱はれてゐる結果として、本來は小高句麗の事件であるものが渤海の事件と辨別し難くなつており、若し此のことを念頭に置いて、「渤海」とあるもののうちから、その實は小高句麗國關係の記事であるものを識別して行くと、そこに小高句麗滅亡過程の消息が見出されるのである。但し小高句麗が渤海として傳へられてゐることは紛れもないにしても、逆に「渤海」とある總てが小高句麗を意味してゐるわけでないこと、更めて云ふまでもない。契丹以後の所謂「渤海」には、内容的に見て五つの用法があつた樣である。

先づ第一は、云ふまでもなく大渤海國である。第二は大渤海を滅した契丹がそのあとに置いた子國の東丹國で、此れは太宗の天顯三年末に至り、多數の渤海人と共に遼陽附近一帶の地に遷され、此の遼陽遷徙後の東丹國もやはり渤海と呼ばれることがあつた。第三は東丹國の遼陽遷徙後、契丹が放棄したその故地に再建せられた渤海、即ち後勃海である。そして第四は小高句麗國、第五はかうした國家名としてでなく、民族としての渤海、即ち契丹・室韋・女眞等に對する渤海人としての用法である。これら各用法の逐一擧例は煩瑣となるので割愛し、ただ小高句麗を指す用例のみを若干示しておく。但し遼史の用例に就いては先にも擧示しているので一二を補足するに止め、主として中國側史書の用例をあげておく。

遼史卷三八　地理志・東京道に擧げてゐる集州は奉集縣を管し、その地は今の奉天の東南約七邦里の奉集堡に當る。[註332] 契丹の侵略前は明かに小高句麗國の域内であるが、同地理志は此れを

漢屬險瀆縣。高麗霜嚴縣。渤海置（集）州。統縣一。
奉集縣。渤海置。

と記してゐる。此の渤海は小高句麗國と解し得る。又遼陽府は九縣を領し、その中の三縣は地理志に記載がないが、記載のある他の六縣は何れも「渤海置」とある。此の渤海も亦小高句麗と解し得る。以上は遼史の例である。尚先章に擧げた遼・巖・鐵利・銀・同州等の例を加へて考へれば、遼史の地理志は小高句麗とあるべきものを悉く渤海と記してゐると見て差支えない。[註333] 次に中國側史書に於ける用例をあげると、冊府元龜（卷九九五）外臣部・交侵・同光二年七月の條に

幽州奏。偵得。阿保機東攻渤海。

とあり、資治通鑑（卷二七三）後唐紀・同年同月の條に

上略。乃先擧兵攻渤海之遼東。云云。

とあつて、阿保機が後唐の同光二年（契丹・太祖阿保機の天贊三年）七月、「渤海の遼東」を伐つたとの牒報が中國に入つており、舊五代史（卷三二）同年月の條にも此れと同一の事實を記した後、その九月の條に於いて

幽州上言。契丹安巴堅自渤海國廻軍。

とあり、資治通鑑（卷二七三）同年同月の條にも

契丹攻渤海。無功而還。

とあつて、阿保機の渤海攻めは功無くして歸つたと傳へてゐる。然し此の牒報は實は頗る不正確なものであつた。その詳細は後文に更めて考説することとして、此所にはただその大要を述べると、當時の阿保機は大擧西征中であり、從つて丹軍の主力は西方に集められ、東方の渤海國を攻擊するに足る餘力が殘されてゐる筈は無かつた。此の丹軍の遼東出擊は、實は遼州の叛亂を鎭定する爲のものであつた。[註334] 遼州は小高句麗國の拂涅州である。時に小高句麗國は既に契丹に滅されてゐた。そしてその地は渤海に入つたのではなく、此れを滅した契丹に占領せられてゐたのである。從つて右中國側の諸書

に云ふ渤海は渤海國に非ずして小高句麗國の故地である。即ち小高句麗（の地）が渤海と呼ばれ、この呼び方が中國側にも傳はつてゐたことがはつきりと認められるのである。

以上の如く、小高句麗を遼史や中國の史書が渤海と呼び、小高句麗國内の州を渤海の設置と書き傳へてゐるとすれば、それは何故かと云ふことが新に問題となつて来る。その解答を一口に云へば、それは小高句麗國に對する渤海國の宗主權が極大で、此れを直轄領土と變り無い程に強く支配し、隣近諸族の目には小高句麗は渤海國の一部にしか見えなかつた爲でなければならぬ。何れにしても小高句麗が遼史や中國の史書に渤海として扱はれてゐる以上、此れらの史書に多見する「渤海」の中に、その實は小高句麗に外ならぬものが含まれてゐることになり、その識別が重要となつてくる。

小高句麗國の州縣制に就いては別に詳考する必要があり、部分的には前に論及してもゐるので、此所には省略するが、渤海は此の國の宗主權を握つてから大いにその開發經營につとめ、相當多くの州縣を設置した。小高句麗には建國當時の十四州、開元末・天寶初の增置九州等の唐籍所載諸州の外に、先に數例を紹介した如く、小高句麗が置いた唐籍外の州もあり、[註335] 此れに渤海が開發設置した州も加はつて、州縣の總數は小高句麗の末年に近づくに連れ增加して行つてゐる。但し渤海國が設置した州縣であることを明確に示した史料は少く、僅かに遼史八卷三 地理志・東京道・遼陽府管縣の中に

興遼縣。本漢平郭縣地。渤海改爲長寧縣。唐元和中。渤海王大仁秀。南定新羅北略諸部。開置郡邑。遂定今名。戸一千。

とある一記事を檢出し得るにすぎない。且つ此の興遼縣も在來縣に對する渤海國王大仁秀の改名で、新縣の開置ではない。然し大仁秀の時代に渤海の指圖で置かれた州縣の少くなかつたことは「開置郡邑」の一句によつて明かで、興遼縣の改名は此の郡邑開置政策の一部として行はれたものの樣である。[註336] 小高句麗國内の州縣の改名・開置等を渤海國が思ふままに行つてゐたことを察するに足らう。從つて遼史の地理志が小高句麗を指して「渤海置」と記してゐるのも、決して全くいはれないものではなく、中には事實渤海が小高句麗内に勝手に開置もしくは改編した州縣もあつたのである。然し「渤海置」とある州縣がすべて渤海國の指圖に從つておかれたものであつたのではなく、唐の指圖や小高句麗の自主的方針で夙くか

らおかれてゐたものもあつたのである。それらを遼史が一括してすべて「渤海置」と傳へてゐるのは、契丹が經略を初めた頃の小高句麗が渤海國の子國としてその強大な宗主權の背後に埋没していたことに大きく因由してゐるものと思はれる。

中世に於ける極東諸國の國際關係を特に羈縻の場合に就いて通觀するに、宗主國が藩屬國内の經營開發を勝手に行ひ、その立場から恣に州縣の置廢改編を斷行してゐる例は少い。[註337] 渤海の宗主權は當時の常識を超えた極大なものであり、屬國小高句麗の自主性は餘りにも影の薄いものであつて、一國家とは名ばかりにすぎず、實態は渤海國領域の一部と化してゐたのである。小高句麗に自主外交權の無かつたことは明かである。此の様な小高句麗が隣近の諸勢力から渤海國と一體のもの、その一部にすぎざるものとして取扱はれ、（小）高句麗と呼ばれるよりも寧ろ一般に渤海と呼ばれてゐたとしても不思議ではあるまい。要するに、小高句麗が「渤海」として書き傳へられてゐる事實は、此の國に對する渤海の宗主權が極大であつたことを示すものと解せられるのであるが、かかる極大な宗主權の行使は、その當然の反面として、小高句麗國を第三勢力の侵犯から絶對に庇護すべき責任を伴つてゐた筈である。小高句麗の庇護は宗主國の執るべき信義の問題であるのみでなく、事實上の領域の喪失を防ぐ渤海國自身の利害問題でもあつた。小高句麗を侵略し、その領域を次第に蚕食して遂に此れを討滅した契丹に對し、渤海が拱手傍觀を許されぬ立場にあつたとすれば、次に此の渤海の動きが小高句麗滅亡過程上の問題として取上げられなければならぬ。

第二項　渤海國の宗主權放棄

小高句麗國の危急存亡に際し、絶大な宗主權を握つてゐた渤海國がその庇護の爲にどの様な動きを示したかは、此れを傳へた史料がない爲にはつきりと知ることができないが、小高句麗が滅んだ時、渤海が全く無疵で健在しており、且つ渤海が大兵を繰出して乾坤一擲の大決戦を契丹に挑んだ形迹のないことから推すに、渤海の宗主國としての庇護には大きな疑問が抱かれ、寧ろ庇護の責務を廻避して小高句麗の滅亡を見送つてゐたと解する外ない様に思はれる。責務の廻避は即

ち宗主權の放棄に外ならぬ。つまり渤海は小高句麗が契丹に攻められて危ふくなつたとき、敢て此れを防衛庇護することをせず、宗主權を放棄して責務を廻避し、見殺しにしたと解せられるのである。若し果して然らば、渤海は此の宗主權を何時放棄したのか、又何が故に放棄したのか等が當面の問題となる。そこで先づその放棄の時期より考へるに、結論より云へば、契丹の太祖九年であつたと推斷せられる。此の推斷の論據を次に列擧する。

先づ第一は、此の年小高句麗が初めて契丹に入貢し、且つ高麗の國名を以て遣使していることである。渤海の小高句麗に對する宗主權が絶大で、その自主外交を強く制約してゐたと考へられることは先に論述した如くである。渤海國の宗主權下に入つた安祿山の亂勃發後の小高句麗の地が專ら渤海の名を以て隣邦から扱はれてゐるのは、かうした國際的自主性の喪失を示すものと考へられる。安史の亂以後を通算するも百六十年の國運を保ち得た小高句麗が自らの國名高麗を名乘つて大唐に入貢した所傳は、先に述べた如く元和十三年のただ一回に止まるが、百六十年間に只一回と云ふ中國に對する没交渉振りも、その中國への入貢路の前面を扼する幽州藩の唐室からの離脱自立と云ふ中國側の事情以外に、やはり小高句麗國自體の國際的自主性の喪失が大きな因子であつたと解せられる。因みに元和十三年の小高句麗の入貢は、唐室の威光が英主憲宗の下に一時的乍ら河朔三鎮を壓したことに因るが、然しそれは此の國の入貢を説明する中國側の事情たるに止まり、此れだけを以てしては渤海の子國として外交權も制せられていた小高句麗が高麗の名を以て單獨に入貢し來つた事情を完全に説明し盡すものではない。高麗の名を以て單獨入貢した所以の説明は渤海・小高句麗側の事情に求むべきである。そこで渤海の内情を觀るに、朱雀五年（唐の元和十二年）二月、僖王大言義薨じ、その弟簡王明忠が即位したが、翌太始元年（唐・元和十三年）二月、在位一年にして薨じ、その跡を宣王大仁秀が嗣いでゐる。仁秀はその四世の祖が大祚栄の弟であつたと云ふから、[註338] 彼は簡王の薨後、渤海王室の疎族から入つて宗家を嗣いだことになる。彼は渤海歴代の諸王中、武王武藝・文王欽茂等と並ぶ第一級の英主であつた。簡王在位期間の短少、疎族仁秀の入嗣、その英邁等、一聯の諸事實を綜合して考へるに、仁秀の入嗣には必ずや複雜な推移があつたに相違ないであらう。血統を重んずる族制社會の

渤海に於いて、疎族の仁秀が王位を詐み得たのは恐らく彼の非凡な人物に負ふものと想はれるが、それにしても疎族の彼が平穏圓滑に大位に就き得たとは些か考へ難く、必ずや史の表面に傳へられてゐない問題が伏在してゐるに相違あるまい。反對派乃至對立候補の活動があつて、國内には継承に絡む動揺が大なり小なり見られたであらう。高麗の名を以てする小高句麗の大唐への入貢は、恐らく此の仁秀の即位前後の渤海政界の動揺に関係を有つてゐるのであろう。或は此の機を把へて大唐に縋りその喪はれた自主性を多少とも取戻さんとしたものかも知れない。何れにしても小高句麗が自らの名を名乗つて大唐に入貢した時に渤海國内部に小高句麗をしてかかる行動を取らしめる瞬時的な間隙があつたことだけはほぼ紛れないものと解せられるのである。即位後の宣王仁秀は大いにその英邁振りを發揮して四隣に武威を耀かし、特に小高句麗に對しては一段と強壓を加へ、州縣の増置や改編を恣にしたこと、先に例をあげて説明した如くである。羈縻抑壓の強化にはその即位前後に於ける離脱的な唐朝入貢に對する懲戒乃至今後への一段の警戒の意味がこめられてゐたのかも知れない。かくて小高句麗は仁秀以後も一段ときびしくなつた渤海の制壓に緊縛せられて自主外交を喪つてゐたのである。それが契丹の太祖九年にその名を以て入貢して来たことは、明かに渤海の強力な此れまでの羈絆から解放せられたことを意味すると見なければならぬ。然も此の解放が小高句麗の自力強化による渤海からの取得でないことは云ふまでもない。當時の小高句麗國は既に契丹の領土蚕食を被りつつあり、日益しに募る契丹の強壓に國勢甚しく萎縮しつつあつたのである。此の渤海からの解放は小高句麗が克ち取つたのではなく、渤海側から行はれたものと見なければならぬ。そしてそれは渤海の小高句麗に對する厚意の贈りものとしてではなく、押寄せる契丹の威力に恐れを抱き、此れとの衝突を避けんとした自國本位の打算的駈引に出たものと解せられる。小高句麗の契丹への此の初入貢、即ち渤海への隷屬から契丹への轉附が、渤海の勸奨によつたものか、それとも契丹に轉附する外に自存の途なしと知つた小高句麗の離脱を渤海が止むなく承認したものか、その邊の所まで深く探ることはできないが、何れにしても渤海が小高句麗に對する宗主權を放棄したのは、小高句麗庇護の責を廻避する爲であり、それは小高句麗の庇護が契丹との大衝突にまで發展する危険があるのを恐れた爲で

ある。太祖九年に於ける契丹への小高句麗の初入貢こそは、渤海が此の年小高句麗に對する宗主權を放棄したと推斷する最大の論據である。

第二の論據は、呉越・新羅等、海路遼東に往來して貿易の利を逐つてゐた諸國が、此の年から同じく契丹への入貢を開始してゐることである。既述の如く、呉越や新羅等の契丹への入貢には領土的政治的な使命や駈引はなく、ただ遼東貿易に於ける在來の權益を維持し發展せしめんとする經濟活動の一部をなしてゐたにすぎない。從つて彼等の契丹への新な入貢は、彼等が從來その市場として來た遼東の實權を契丹が掌握したか、又は掌握必至の形勢を作り上げてゐたことを示す。そしてそれは契丹の小高句麗に對する新な優勢、即ち渤海の宗主權喪失に連るものと見ることができる。両強國の實質的羈縻が同時に小高句麗に共在し得たとは考へられないからである。要するに、太祖九年に於ける新羅・呉越等の海洋活躍國民の契丹への初入貢は、小高句麗の領域である遼東への契丹の優位確立、渤海の勢力後退に對應する彼等の新な帰趨であつたと解せられるのである。

第三の論據は、阿保機の遼東經略が此の年から急速に進展してゐる事實である。先に考説した所に依り、阿保機の遼東經略の推移を年次的に觀るに、その年月の明かなもの、略々推定し得るものは左表の如くである。[註339] 表に就いて先ず注意せられるのは、阿保機の東方經略はその即位前後の四五年間に於いて一しきり活發な展開を見せたのち、しばらく靜まつてゐると云ふことである。此の最初の活潑期に於ける經略地域は主として開原方面から北の女直に向けられてゐる。此の地域は小高句麗

阿保機遼東經略年次表

契丹太祖年號	中國年號	西暦	月	記事
即位以前	天復三年	九〇三	春	伐女直下之
同	天祐三年	九〇六	一一月	討東北女直未附者
即位二年	開平二年	九〇八	一〇月	築長城於鎮東海口
神冊初	貞明二年	九一六	—	鉄利州占領
同じ頃	同	同	—	遼州占領
神冊三年	貞明四年	九一八	一二月	幸遼陽故城
神冊六年以前	龍德元年以前	九二一以前	—	瀋州占領

國の領土とせられてゐた所ではあるが、その本土では無く、開元末・天寶初の交に此の地方を突厥から取入れた大唐がそれを小高句麗に編入し、突厥の衰亡に乘じて北進した大渤海との抗爭に敗れて奔來した純通古斯系靺鞨の諸族、即ち女直をそこに安挿した所である。阿保機が即位前から早くも此の地方の經略に乘出したのは、そこが小高句麗の本土ではなく、住民も族種を異にし、いはば附隷地區として緩やかな羈縻關係に止まつてゐたからであらう。即位前後の東方經略に於いて阿保機が占領した小高句麗國本土の地は僅かに鎮東関が傳へられてゐるにすぎない。此所の占領は對後梁関係から阿保機の急ぐ所となつたのであらう。此の鎮東関を占領してから後の八年間、阿保機が遼東を侵占した形迹は傳へられてゐない。即ち即位前に初まる阿保機の遼東經略は初め小高句麗本土の攻取を大きく憚り、特殊事情のあつた鎮東関を除く外は、專ら開原以北の小高句麗國の羈縻地區に限られてゐたのである。所が此の羈縻地區の經略を以て一旦鉾を収めてゐた阿保機の東侵は、小高句麗が初めて入貢した太祖九年の翌年たる神冊元年頃から再び活潑に展開せられ、鐵利・東平・瀋・檀・帰等の小高句麗本土内諸州が五六年の間に相次いで契丹の占領する所となつてゐる。然もそれは遼陽（東平）、新城州（帰）等を含む小高句麗内の要地である。即ち再開せられた阿保機の遼東經略は小高句麗本土の、然も心臓部を目がけて直進して行つたわけである。此れら諸州の外に尚銀・同・遼・巖の四州が阿保機設置の州として傳へられてゐるが、此の四州の地の占領年次は判つてゐない。然し龍化州より東進する街道線上の遼東第一州たる遼州、それに近在する同・銀州等の占領は恐らく鐵利州等とほぼ同時の神冊初年頃であろうし、巖州は遼陽・瀋州等とほぼ同じ神冊三年頃に相違あるまい。して見ると、即位翌年の鎮東関占領以外は小高句麗の本土に手をつけず、開元以北の羈縻地區の經略を以て一旦東侵を停止してゐた阿保機は、神冊元年より猛烈な東侵を再開し、小高句麗の本土を覘つて數年の中に此れを席捲したことになる。神冊元年は、渤海が小高句麗に對する宗主權を放棄して契丹との激突を廻避せんとした太祖九年の翌年である。阿保機の遼東侵攻再開が此の渤海の宗主權放棄に乘じたものか、それとも阿保機の小高句麗大侵攻の動きが先にあつて、それを懼れた渤海の小高句麗見殺しが決定せられたのか、その邊の所は判らないが、何れにしても太祖の九年に渤海の小

高句麗放棄があり、その翌神冊元年から開始せられた阿保機の小高句麗討滅作戦に對し、渤海はみすみす此れを見殺しにする態度を採つてゐたと推定せられるのである。

阿保機の遼東經略を大觀するに、先づ小高句麗の羈縻地區である開元以北の女直住地を伐ち取つて暫時侵略を停止し、その間に新占領地を整備しつつ國力を蓄へ、又他の接境勢力を擊破し、頃合を見定めて小高句麗を滅し、遼東第一の開發地を収め、ここで再び東侵の手を休めて此の新領土の整備につとめ、その體制成るを俟つて大擧大渤海を伐つと云ふ順序を踏んでゐて、その遠大にして緻密な經倫に驚嘆せざるを得ない。

以上、三つの論據を綜合するに、渤海は長年小高句麗に對して絶大な宗主權を振つて来た関係から、新興阿保機の東進に對し、小高句麗を庇護防衛すべき立場に在つたのが、阿保機即位の九年に至つて此の責務を廻避する為の宗主權放棄の擧に出で、かくて渤海に見離された小高句麗はそれより三年後に滅されて終つたと云ふことになる。然らば渤海は何故に久しく經營支配し来つた小高句麗を投げ出して見殺しにしたのか。勿論、急發展を遂げた契丹の軍事力に抗し難しと見た為であるには相違ないが、それにしても海東の盛國を誇つて来た渤海が見るべき決戦も交へた形迹なきままに後退したことは如何にも不甲斐なく思はれ、そこに寧ろ渤海として契丹に自ら譲らざるを得ない内部事情を抱いてゐたのではないかと推測せられる所以が見出される。小高句麗の領域は満洲内で最も開け、農・漁・林・鑛・工等諸産業の著しく進んでゐた所であり、その開發には宗主權をもつた渤海が特に力こぶを入れた所でもあつた。從つて渤海の小高句麗放棄はそこが渤海に取つて吝むに足らぬ所であつた為ではない。このことは更めて詳説する。從つてその放棄には渤海の内部事情が作用してゐたと考ふべき餘地が益々感ぜられる。事實、渤海は此の大外患に際して大内訌を惹き起しており、それが對契丹消極策を採らしめた最大の原因をなしてゐたのである。

第三項　大渤海末年の對外消極化と大内訌

海東の盛國と謳はれ、二百二十餘年の長い繁栄を誇つて来た大渤海が、一度び新興の遊牧勢力契丹の阿保機に遼東を犯

されるや、安史の亂以来その子國として絶大な宗主權を振ひ、域内の開發經營に努力して来た小高句麗を見離し、その肥沃豊饒な地を放棄して只管丹軍との激突を廻避せんとしたのは、一見、大國に相應しからぬ不可解な擧措と云ふべきである。殊に「三渤海當一虎」と恐れられた勁勇の國民を擁し乍ら一大決戦を試る勇断を果し得なかつたその末路は情けなくさへ思はれる。常に西方の契丹を蔑視して来た誇り高き渤海人が此の様に惨めな最後を遂げたに就いては、實はそれなりの理由があつたのであつて、それは外ならぬ此の國内の大内訌であつた。

契丹の大渤海討滅の遠征がたやすく成功し、あつけなくその都城を屠つたことは周知の如くであるが、それは丹軍の東征が大渤海を内より震憾させてゐた大内訌に乗じたからであつた。遼史巻七五 耶律羽之（遼初の國内最高の遼東事情通）傳に

先帝太祖因彼（渤海）離心乗釁而動。故不戰而克。

とあるは、丹軍の渤海遠征がその内訌に乗じたものであることをはつきりと傳へた記事である。此の内訌の詳細は渤海史上の大問題として別に詳考せらるべきもので、小高句麗を主題とする本稿で詳述することは避ける外ないが、それが極めて大規模であり、深刻であつたことだけは、本稿の考察を進める上に、是非明かにしておかなければならぬ。

大渤海末年の大内訌に就いて若干の史料を傳へているのは半島側の高麗史のみで、遼史や中國側史書には何ら手がかりとなるものが見出せない。高麗史巻一太祖世家には、上表の如く、その即位八年の九月と十二月とに數千人に上る渤海人の

高麗太祖八年渤海人来投表

月日	来投記事
九月丙申	渤海将軍申德五百人来投。
庚子	渤海禮部卿大和均・均老司政大元均・工部卿大福譽・左右衛将軍大審理等一百戸来附。
一二月戊子	渤海左首衛小将冒豆干・検校開國男朴漁等率民戸一千戸来附。

来投記事を載せており、此れを觀察するに、来投者の首領は王姓大氏を名乗る者が多く、且つ文武の顯官要職を帶する有力者であり、小民の散發的な亡命ではない。この相次ぐ渤海人集團の来投こそは、遼史の耶律羽之傳に云ふ「因彼離心乘釁而動」の釁に該當する渤海國の内訌に因由したもので、此のことは既に夙く池内博士が指摘論考せられてゐる所である。[註340] 来投の月日に徵するに、此の大がかりな内訌は明かに九月もしくはそれ以前に爆發して十二月もしくはそれ以後に及び、少くとも半歳、或はそれ以上にわたるものであつたと推測せられ、國内をゆさぶる大規模なものであつたことが察せられる。高麗太祖の八年は契丹の太祖の天贊四年に當る。阿保機が大渤海遠征の兵を擧げたのは此の年の十二月、即ち渤海の内訌が正に酣の時であつた。耶律羽之の云ふ如く、「乘釁而動」いたわけである。尚此の内訌の實態は、嘗て詳考した如く、[註341] 大渤海最後の國王大諲譔とその逸名の弟との間に展開せられたもので、大諲譔が契丹に擒えられ大渤海が滅んだ後は、難を逃れた諲譔の世子大光顯との争として引き継がれ、契丹占領下の大渤海故領に於いて、各々丹軍未征の僻隅に據つて相對抗すること數年、契丹の大渤海故領放棄後は更にその對立を激しくし、結局、逸名の王弟が制勝して大光顯を高麗に逐ひ、所謂後渤海を建國するのである。大渤海が阿保機の東征軍にあつけなく滅されたのは、主として此の大内訌の為に擧國一致の迎撃が出来なかつた為である。それより以前、小高句麗が契丹に侵されてゐた時、此れを庇護して契丹に武力決戦を挑む挙に出でず、長年の宗主權を放棄して子國を見殺しにしたのも、やはり此の内訌に因つたものと思はれる。内訌の大爆發は天贊四年であるが、此の爆發に至るまでの内紛は恐らくかなり長くくすぶり續けていたであらう。そしてそうした早くからのくすぶりが大渤海をして小高句麗の庇護に思ひ切つた援兵出動を逡巡せしめた所以であらう。内訌の始期は知るべくもないが、契丹對策の消極化と内訌との関係を以上の如くに見てくると、小高句麗國が渤海の羈縻から離れて契丹に入貢轉屬した阿保機即位の九年は此の内訌が愈々渤海の命取りの様相を呈した年であつたのではないかとの考えが生れてくる。果してその様に断定し得るかどうか、尚検討の餘地があるにしても、渤海が新興契丹の東侵を阻止し得ず、長年の子國小高句麗を見殺しにし、次いで自らもあつけなく滅された最大の所以が此の國を震憾せしめた大内訌にあつた

ことだけは紛れないものといえる。

阿保機に率ゐられた契丹が新興の勢を以て東侵を開始した時、老大國の大渤海は國内を分裂に瀕せしめた内訌に惱まされ、その為に契丹と武力的大決戦を交へる力を喪ひ、みすみす小高句麗の滅亡を見送らざるを得なかつたが、然し全く無策の拱手傍観に終始したのではない。大兵力を投入し得ない制約の下で尚なし得る限りの對策は試みたのであつて、それは當然謀略的性格のものにすぎなかつたが、小高句麗滅亡史上の問題として見逃し得ないものである。

第四項　渤海國の遼東保衛・小高句麗國領恢復の謀略

内に大内訌を抱えた大渤海は、小高句麗庇護の為の出兵をなし得ざるのみか、自らの滅亡に際してさへ、その國力を悉した防衛をなし遂げることが出来ず、あえない最後をとげることとなつた。然し國軍の出動を制約せられ乍らも丹軍東進に對する牽制防遏の謀略は百法手を盡してゐた様である。阿保機の小高句麗經略はその着手から討滅までに十餘年の歳月を經ており、從つて此の間に渤海が小高句麗庇護の為に打つた手も色々あつたと思はれるが、傳存史料の極度に少い中から指摘し得るのはせいぜい數點にすぎない。その気附き得たものを時代順にあげて考説する。

阿保機が小高句麗の本土地區の經略に手をつけたのは、現存の史料が示す限りでは、その即位二年の鎮東関の占領が最初で、頗る早かつたと云へるが、それより八年の間は新占領の所傳がなく、此の間、侵略を停止してゐたことが察せられる。それは契丹の鉾先が他に向けられてゐたことに関係する所が大きいが、それにしても八年間にわたって侵略を廣げてゐないのは、弾丸黒子の小高句麗を恐れた為ではなく、宗主國の渤海を憚つた為に相違なく、此の段階に於いては尚大國渤海の威力が小高句麗の保衛に役立つてゐたと見るべきであらう。渤海が鎮東関を奪回し、進んで契丹に報復の一撃を試ることをしてゐない所に渤海國の老衰的兆候を露呈してゐるが、それにしても渤海の宗主權が契丹の東侵を數年抑制したこをは紛れなく、此の間、渤海も意識して契丹の牽制につとめてゐたであらう。此の期間を渤海の契丹東進に對する抵抗の第一段と見ることができる。所が此の宗主權を渤海は放棄した。それは内訌の為に外を構ふ力を喪つた為である。宗主

權の放棄は阿保機即位の九年で、それまでに大いに實力を蓄養した阿保機は翌神冊元年頃から猛然と小高句麗を襲ひ、同三年には早くも此れを滅した。それは三年の六月以前であつたが、小高句麗はその滅亡に先立つ同年二月に契丹に降服請和の使臣を遣した。所で此所に注意すべきは此の二月に渤海の使臣が同じく契丹に遣されてゐることである。即ち太祖紀の同年二月の條に

晉・呉越・渤海・高麗・回鶻・阻卜・黨項及幽・鎮・定・魏・潞等州。各遣使来貢。

とある。此れら十二の勢力[註342]が同時日に入貢したとは思はれないが、相前後したものであつたことは、その一括掲記から疑ふべくもない。遼史に渤海國の入貢を記すは、前後を通じて此れが唯一のものである。東西に對立して互に仇敵視してゐたとは云へ、地を接してゐた以上、時に往来接衝のあるは當然で、彼我の報聘が史傳そのままに此の一回に止まつてゐたと即断するは慎むべきであらうが、それにしても遼史に傳へる渤海遣使の記事がただ此の時の一回に止まつてゐる事實は、此の使臣の入貢が特に重大な意味をもつてゐたものであることを證してゐると見て誤り無いであらう。但し契丹人に對して高い優越感をもつ渤海人が此の時點で契丹に稱藩したとは考へられないから、遼史が入貢と云つてゐるのは、恐らく契丹側の一方的な解釋で、その實は或る使命をもつた渤海使臣の入國であつたであろう。その使命の中味は傳へられてゐない。然しただ漠然たる修好儀禮の入使であつたとは考へ難い。此の遣使が小高句麗の降服請和の遣使と時間的に一致してゐることから推すに、両遣使の間には必ずや密接なつながりがあつたと見るべきであらう。此の小高句麗の遣使は滅亡を免れんが為に打つた最後の交渉であつた。それは必ずや契丹に忠誠を誓ひ屬國として存命を許されんことを請願したものに違ひない。渤海の遣使は小高句麗の此の請和の運動を助けるべく、共に契丹に働きかけたものではあるまいか。小高句麗の地が契丹の直轄領土化することに比すれば、たとへ契丹の專屬國としてであつても、小高句麗國が存續して遼東を領してゐる方が渤海に取つて遥かに好ましいことであつた筈である。遊牧勢力の小高句麗國支配は古く突厥時代に先例があり、復興突厥の隆昌時代、小高句麗國は前後二回にわたつてその附庸國とせられたが、その國家としての存續を許されて

ゐた為、突厥が勢力を失ふと掌を返すが如く唐に轉屬し、更に唐が安史の大亂によつて對外威力を失墜すると、渤海は忽ち此れを支配下に取入れた過去の歴史に照して考へるならば、若し契丹の支配下に小高句麗の生存を保たしておくことができるならば、何時の日か、その宗主權を奪回する形を以て遼東の支配を再確保する道が残されることになる。時恰も渤海は深刻な大内訌の為に對外活動力を殺がれてゐたが、此の問題が解決すればそこに宗主權奪回の力が忽ち生れ出た筈である。渤海としてはその日まで何とかして小高句麗國を生かしておき、契丹・渤海両強國間に介在する緩衝國家としての役割を果させたかつたであらう。渤海遣使の主目的は恐らく小高句麗の命乞ひに在り、その為に使臣の態度に自ら低姿勢の所もあつて、それが契丹をして渤海の遣使を入貢と受取らしめた一因となつたのではないかと思はれる。然し渤海に取つて都合のよいことは、私かに渤海擊滅を期する契丹の阿保機にとつてそれだけ都合の悪いことである。百六十年間の羈縻經營を通じて渤海國の息吹きが隅々まで浸み渡つてゐる國を存置することは決して安全でない。一度び契丹に弱味を生ずれば忽ち反轉して渤海の有力な味方に帰する恐れがあり、渤海もそれを覘つてゐることは阿保機に充分讀みとれた筈である。所詮、契丹に取り渤海と一つ穴のむじなである小高句麗は生かしておけぬ存在であつたのである。契丹が請和の願ひに耳を籍さず一気に小高句麗を滅したのは、契丹として當然であり賢明であつたと云ふべきである。つまり神冊三年二月の渤海より契丹への遣使は小高句麗國の為の命乞ひであつたと解せられるのであつて、若し此の解釋にして大過なしとすれば、それは國軍の出動不可能と云ふ制約を負はされた渤海國が長らくの子國であつた小高句麗の為に打つたせめてもの手であつたことになる。入丹した渤海使臣の態度は自ら低姿勢にならざるを得なかつたであらう。從来契丹人を輕侮してゐた渤海人の低姿勢は契丹人に取つて小気味よいものであり、心に満足と優越とが湧き起つたであらう。渤海使臣の入朝を藩屬國の入貢として遼史が取扱つてゐるのは、ただ單に遼側の獨善的解釋のみでなく、かかる解釋を取らしめる因子が渤海使臣の姿勢の中に見出されたことにもよつてゐると見るべきであらう。

渤海が次に打つた對策と解せられるのは、小高句麗が滅び契丹が遼東を領有して後、此の契丹の勢力を驅逐せんとする

暗躍である。そして此の暗躍の具體化した事件が先に言及した遼州渤海人の叛亂と此れを繞る東北諸民族のの動きであつたと解せられる。そこで此の事件を此の立場から考察する。阿保機が小高句麗國の拂涅州を奪つて遼州を置いたことや、遼史巻八三地理志・東京道の遼州の條に

遼州。中略。太祖伐渤海。（此渤海即小高句麗）。先破東平府（此東平府即遼州之誤）遷民實之。

とあるは此の事實を誤謬まじりに傳へたものであること、更には此の遼州設置の年（即ち拂涅州占領の年）がおそくも神冊の初め頃と解せられること等は、先に詳しく論考した如くである。契丹の遼州の州民に編管せられた主體は、云ふ迄もなく小高句麗國の拂涅州の州民である。右記事に「遷民實之」とあるは、文字通りに受取るべきで無く、實際は此の地の土着民を州籍に上せたことを傳へたものと見るべきで、そのことは已に津田博士が考説せられてゐる所である。[註343] 此の州民は遼史に云ふ渤海人、即ち小高句麗人である。此の渤海人が天贊三年（九二四）、即ち小高句麗國の滅亡後六年目に叛亂を作した。遼史巻二太祖紀・同年五月の條に

徙薊州民實遼州地。渤海殺刺史張秀實而掠其民。

とあるのが此の叛亂を傳へた記事である。此の亂の始末に就いては契丹側の史料には他に何の所傳もなく。從つて亂の原因・推移や結果等、すべて此れを知る由もない。右の記事を一見した所では、契丹が河北の薊州の漢人俘獲を遼州の地に徙し置いたことが亂の原因を為してゐたかの觀を與へてゐるが、契丹は遼州以外にも東平郡や瀋州等に少からぬ漢俘を徙置してゐるにも拘らず、別段そこに動揺や叛亂のあつた形迹を見られないから、遼州の場合も漢俘の導入を叛亂の原因と解するのは方法的に妥當でなくなる。漢俘の導入と作亂とが併せ記されてゐるのは、たまたまそれが時期的に重つてゐたからであらう。契丹側の史料からは此の亂の真相は結局つかめないのであるが、幸にも中國側に此の亂に関するものと思はれる記事があつて考察の手掛りを與へてゐる。

冊府元亀巻九九五外臣部・交侵門・後唐・同光二年七月の條に

幽州奏。偵得。阿保機東攻渤海。

とあり、舊五代史卷三二後唐・莊宗紀・同光二年七月の條にも同一事實を傳へ、更に同じ年の九月の條に

幽州上言。契丹安巴堅自渤海國廻軍。

とあつて、後唐の同光二年（九二四）七月、阿保機が渤海を攻めた情報を入手し、次いで九月にその軍を旋したとの報を得てゐる。資治通鑑卷二七三後唐記・同光二年七月の條には更に詳しく

時東北諸夷皆役屬契丹。惟渤海未服。契丹主（阿保機）謀入寇（中原）。恐渤海掎其後。乃先擧兵攻渤海之遼東。云云。

とあり、九月の條に

契丹攻渤海。無功而還。

とあつて、此の阿保機の所謂渤海攻擊は中原入寇の準備として背後の勢力を擊碎しおかんとしたものであること、その攻擊地點は遼東であつたこと、功無くして還つたこと等を傳へてゐる。すべて幽州の得た牒報であるが、資治通鑑の記事は一段と詳しいと同時に、牒報の中に中國人としての契丹に對する恐怖に出た推測が加へられてゐる。即ち契丹軍の遼東攻擊が中原への侵入の準備であると云ふのは、事件そのものではなく、中國人の憶測であり、然も此の憶測は後述する如く當つてゐないのである。

後唐の同光二年は契丹の天贊三年、即ち遼州の渤海人が叛亂を起した年に當る。そこで此の年の丹軍主力の動きを遼史によつて檢討するに、七月から九月にかけて阿保機が遼東に出征するが如きことは有り得なかつたことが確められる。即ち此の時阿保機は吐渾・黨項・回鶻（所謂甘州回鶻）等を遠征して遥か西方の陣に在つたのである。遼史卷二太祖紀によるに、阿保機は此の年六月乙酉、「両事未だ終らず、その一事を成さん」との意味の大詔を發し、皇太子倍を監國として留守に残した外、次子の大元帥堯骨以下契丹軍の主力を悉して大擧西征し、吐渾・黨項・回鶻を伐つてゐる。「両事」とは西の吐渾・黨項・回鶻等の征服と東の渤海國の討滅との契丹の二大宿願を指したものである。第一事、即ち西征の目的を

果した阿保機が凱旋したのは翌四年九月で、實に一年と三箇月振りである。從つて中原側の史籍が一樣に傳へてゐる阿保機の遼東攻伐の時期たる七月乃至九月の頃にかけて彼は正に西征に從事中で、遼東に在る理は絶對に無かつたのである。若し彼が遼東に赴いたとすれば、それは六月以前でなければならなくなる。六月或はその前の五月と雖も、六月出發の西方大遠征の準備に忙しく、その東征は事實上困難であつたと思はれる。遼史には阿保機が此の前後に東征したとの記事をどこにも載せてゐないが、それは粗漏ではなく、事實東方親征が無かつたことの證據と見るべきものであらう。然し五月に遼州で叛亂の起つたことは紛れない事實であるから、阿保機の親征や契丹軍主力の東征は無かつたにしても、叛亂鎮壓に必要なだけの兵力が差向けられたことは疑ふべくもない。遼史に此の叛亂に對する出兵に就いて傳へる所がないのは明かに粗略である。中國側の史籍が傳へてゐる「阿保機攻渤海之遼東」は必ずや此の鎮壓の為の出兵を指してゐるのであらう。果して然りとすれば、此の謀報が中國に入つたのは七月であるから、鎮壓軍の出動は七月か、又は六月であつたと解すべきものとなる。亂の勃發が五月であつたのに對し、鎮壓への出動はやや遲きにすぎる感がある。それは或は中國側の偵知がおくれた為かも知れないが、寧ろ阿保機の西征出發直前であつた為に東征軍の編成に手間どつたと見るべきであらう。阿保機は此の遼州の叛亂を鎮定しないままに西征に出發したわけで、それは此の叛亂が大事に至る恐れのないことを見越したからであらう。阿保機の率ゐる丹軍主力は西征中であるにも拘らず、遼州に向つた丹軍を阿保機の親征であるかの如く傳へた幽州の偵諜は不精確であつたと云はねばならぬ。更に又此の丹軍の東征を以て契丹が將に中原を大侵略せんとする準備的な背面作戰であると信じた幽州の觀測も明かに的外れであつたわけで、結局、幽州の諜報網は丹軍東征の事實を摑むことはできたが、それより大きな作戰の阿保機の大西征をつかみ得ず、そこから東征軍のもつ目的や意義を大きく見損つたと云ふことができる。翌四年九月に大西征より帰還した阿保機は、續いて十一月に「両事」の一である渤海の討滅に向ひ、中原には攻めかかつてゐない。契丹は境外の或る勢力を攻擊の目標に置いた場合、第三の勢力に虛を衝かれることを防ぐ為、此の第三勢力に牽制の陽動攻勢を行ふを常套としてゐたので、こうしたことを見なれて来た中國の邊臣

や偵諜者は遼州への丹軍の出動を中原に入寇する為の背面陽動攻勢と解したのであらう。絶へず契丹の侵暴に苦しんで来た中國人として無理からぬ観測であつたともいへる。要するに、中國側史籍の傳へてゐる契丹の「伐渤海之遼東」は遼州の叛亂を鎮定する為の丹軍の一部部隊の出動を過大に見誤つたものであるが、然しその所傳によつて遼史に所傳を缺く遼州の亂の推移が、五月作亂、七月丹軍出動、九月旋軍として一應順序立てられる。此の旋軍に就いて中國側史籍は「無功而還」と云つてゐるが、此れは此の時の丹軍の出動を渤海攻撃と受取つた中國側から見ての「無功」であらう。もともと渤海攻撃では無かつた此の時の出動丹軍が渤海攻撃の功をあげる筈は無かつたのである。遼州鎮定に出動した丹軍の成果は此の中國側史籍に云ふ「無功」に拘れることなく、全く別途に考究すべきである。

阿保機の統率下に於ける契丹の飛躍的大發展は渤海に取り不安の種であり一大脅威でもあつた。塞外を統一した遊牧勢力が必ず満州に襲ひかかるは過去の長い歴史がはつきり示してゐる所である。現に小高句麗は既に契丹に滅された。加ふるに、吐渾・黨項・回鶻等の西方勢力の征服と渤海の討滅とは阿保機宿願の両事なりと宣言せられ、その一方の西征軍が編成せられてゐるとすれば、渤海として對契丹策を考へなければならぬ。もはや遷延は絶對に許されぬ。然し武力的決戦は大内訌に妨げられて敢行し得べくもない。小高句麗を見殺しにしなければならぬ大内訌は早急に決着すべくも無く、大渤海滅亡の後にまで續いたのである。自らの武力を携げて決戦に臨み得ない渤海として契丹の獨走的馳驅を妨げる方法は他民族を煽動して契丹と戦はせる外ない。然も内に問題を抱えて自らは契丹との争に正面に立ち得ないとすれば、此の煽動は暗躍の形を採らざるを得ない。此の様に考へて、冊府元亀（卷九九五）外臣部・交侵門・同光二年九月庚戌の條に

有自契丹部降者。上言。女眞・回鶻・黄頭室韋。合勢侵契丹。召北部酋長禦捍。

とて、女眞・回鶻・室韋等の諸族が聯合して契丹を伐ち、契丹は北部の酋長達に此れを禦がしめたとある記事を検討するに、此れら諸族の聯合の裏に渤海の暗躍が潜んでゐる様に思はれる。先ず此の記事から知られる反契丹聯合の重要事項を抽出するに左の諸條となる。

(イ) 此の情報は契丹部より降つた者が伝へたものである。
(ロ) 情報が伝へられた同光二年（契丹の天贊三年）九月は遼州の叛乱が作つた五月より四箇月の後であり、叛乱鎮圧の丹軍が引揚げたのと同じ月である。
(ハ) 契丹軍の主力が阿保機に率ゐられて西方に遠征の留守中に当る。
(ニ) 情報の内容は女真・室韋・廻鶻等の契丹に対する大規模な連合攻勢である。
(ホ) 連合勢力は攻勢に立ち、契丹側は防勢をとつてゐる。
(ヘ) 連合勢力の主體である女真・室韋・廻鶻等の諸族は契丹の北面の者である。

右諸條項の中には、此の事件を單獨的な問題として見た場合には理解し難いものが含まれてゐる。先づ第一に、自らの内部的大統一さへできてゐなかつた女眞・室韋・廻鶻等が大規模な聯合作戦を展開したことの説明ができかねる。第二に、彼等の蹶起の時が遼州の亂と略々重つてゐることも單に偶然として濟されそうにない。聯合勢力の中に滿洲の住民である女眞が含まれてゐる以上、遼州の亂と無関係と見難いが、その関聯が疑問のままに残ることとなる。契丹の苛酷な劫掠に對して惹き起された諸族の抵抗が抗争繼續の中で聯合に發展したものでなく、丹軍主力の西征をねらつた攻勢的蹶起の聯合であり、更にそれが契丹東境の遼州の叛亂とも繋つてゐるとすれば、此の事件の内容は頗る大規模なものとなり、頗る廣汎綿密に計畫せられたものとなるが、その主導勢力を未開な當時の女眞や衰残の室韋等に求めることは疑はしい。かくてこの事件の立定指導者として渤海を想定するに、以上の諸疑問はすべて冰解し、事件の全體が極めて合理的に説明できることとなる。そこで此の反契丹事件を渤海の陰からの煽動指揮によるものと假定して問題を説明して見ることとする。

先づ第一に、内部的にさへ大統一の組織をもたなかつた女眞・室韋・廻鶻等の大聯合が形成せられた所以は渤海の指導として理解せられ、又此れら諸族の蹶起が契丹の過酷な劫掠への怒りの爆發と云ふ形でなく、寧ろ丹軍主力の遠征不在を覘つた積極攻勢の為の團結であつた所以も肯かれる。次に遼州の叛亂と女眞等諸族の蹶起との時期的関係が有機的に結びつけられる。遼州の叛亂は五月に作り、九月には鎮定せられたと解せられる。女眞・室韋・廻鶻等の契丹攻撃が中國に傳

へられたのは九月で、契丹よりの投降者の齎した情報であるから、此の事件の起つた時期は九月以前となる。從つて遼州の亂と時期的に重つてゐたことが明白であるが、こうした亂の廣大な地域的擴りも渤海國の暗躍的指導があつたとすれば敢て異とするに足らなくなる。かくて遼州の叛亂や女眞・室韋等の聯合反丹攻勢はすべて渤海の煽動と指揮を受けてゐたものと推斷する。

天贊三年、阿保機が渤海の討滅と西方諸勢力の征服とを彼のなすべき「両事」として宣言し、その一事である西方の遠征に出動するに及び、内部に大きな問題を抱え乍らも、今や對契丹策に手を打たねばならなくなつた渤海は、既に契丹に滅されてゐた小高句麗の遺民や契丹の膨脹政策に大きな恐怖をもつ女眞・室韋・廻鶻等を陰かに煽動糾合して契丹に反擊せしめたのであらう。小高句麗遺民の蹶起反抗の地點を遼州に置いたのは、此所が契丹の遼東への侵入口であつたので、此所を抑へれば遼東に於ける契丹の勢力は全面的に大きな打擊を受けることになると見たからであらう。遼州の亂はこうした渤海の契丹攪亂策に出たものであるが、此の反亂の主體となつた者は小高句麗の遺民で、彼等は小高句麗の復興を心に願つて渤海に踊されたともいへよう。

五月に遼州に蹶起した小高句麗の遺民は七月に契丹の鎮定軍を迎へた、その結果は遼史に記してゐないが、結局は敗れ去つたのであつて、丹軍の九月引揚げは鎮定の時期と見るべきものである。中國側の史書は此の引揚げを「無功而還」と傳へてゐるが、此の「無功」の意味に就いては先に述べた如くである。所で中國でさへもその結末を傳へてゐる遼州の叛亂が遼史に傳へられてゐないのは些か物足りない感がする。勃發を傳へた叛亂の結末は、いかに粗略の定評ある遼史としても、此れを傳へて然るべきものと思はれる。此の樣に考へるならば、先にあげた太祖紀の「渤海殺刺史張秀實而掠其民」とある記事は、遼州の亂の勃發を傳へると共に、その結末をも傳へたものではないかとの解釋が生れて來る。即ち遼州に亂を作した小高句麗の遺民は、鎮定の丹軍が來征する段階になり、到底抗戰し難きを覚り、州民を引連れて逃げたのであらう。此の場合の拉去州民は同族の小高句麗遺民、即ち遼史に云ふ渤海人で、逃去地は未だ契丹領外となつてゐた蘇子阿

流域以東か、又は亂の煽動者である長年の宗主國渤海の領内かであらう。契丹が到着した時、遼州の主住民は藻抜けとなつてゐたのであらう。契丹領内に於ける渤海人の叛亂は後年まで屢々起つてゐるが、それらは大抵渤海本土、即ち後渤海の裏面からのそそのかしが働いており、事敵はずと見た作亂渤海人は遠く渤海本土の奥に逃入してゐる。契丹は農耕民俘掠を領内に徙しつつ國力の充實をはかつて来た國として、彼等の國外逸去を重視し、逃亡の防止、逸去者の奪還に失敗した文武官を處罰することがあつた。景宗の保寧年間に叛いた黄龍府の渤海人衛将燕頗等一黨の兀惹（後渤海）城への逸走が鎮定軍司令官の處罰問題に發展してゐるのはその一例である。[註346] 契丹の此の様な農耕民緊縛政策から見れば、遼州の叛亂渤海人の大擧逸逃は叛亂對策として失敗であり、鎮定軍はその意味で無功を責められたかも知れない。かかる意味での鎮定軍の無功が契丹から中國に投降した者によつて語られ、それを聞いた中國人は無功を渤海討伐の無功として受取つたのかも知れない。要するに、遼州の叛亂は渤海の策動に踊らされた小高句麗遺民のはかない復興運動の性格をもつてゐたと考へられ、とにかく小高句麗遺民を助けた意味に於いて渤海が小高句麗の遼東保有の為に打つた第三段の手であり、最後の手でもあつたといへるのである。

以上の如く考察すると、國軍の領外出動をなし得なかつた渤海は、小高句麗の領東保衛の為に武力決戦以外の手を百法講じたのであつて、吝みなく放棄したのではないと断言して差支へない。然し渤海の策動は悉く失敗した。かくするうちに阿保機は天贊四年九月に至り赫々たる戦果を荷つて西征より凱旋した。両事の一事は達成せられ、西方の顧慮は無くなつた。兵馬に一息入れさせた阿保機は、同年十二月乙亥、「所謂西事已畢。惟渤海世讐未雪。豈宜安駐」と詔して大渤海國遠征の軍を發し、一路東進して同月末には渤海境上の関門扶餘城を圍み、翌天顯元年（九二六）正月早々此れを陥れ、内訌に活動力の鈍つてゐた渤海領内を驀進してその月のうちに首都龍泉府を陥れ、國王大諲譔を俘獲し大渤海國を滅した。小高句麗が滅んでから僅かに八年後である。聖暦元年（六九八）大祚栄が震國を建てて以来二百二十餘年の長い歴史をもち、海東の盛國を誇つた大渤海國もその最後は實にあつけなく、ここに契丹の塞外制覇は固まり、従つて小高句麗の復興

もその望みを永久に失つたのである。

歴史上の遼東地方は滿洲一帯に據る通古斯系、蒙古草原に據る遊牧系、中國漢人の三勢力が接觸する緩衝地帯の役割を果して来た所である。大唐の援助によつて此所に建てられた弱小小高句麗國は、當然乍ら此の緩衝的條件から免れ得ない國であつた。即ち右の三勢力の均衡によつて生れ、その均衡の中に生き、均衡消滅の日に滅ぶ可き宿命を負つた國であつたのである。大唐の斡旋によつて生れた此の國が、突厥強ければ此れに隷し、大唐中興の勢を示せば再び復帰し、大唐・突厥共に衰へれば渤海に帰屬し、唐末の中國の大混亂、渤海末年の大内訌が共に長く續く中に阿保機に率ゐられる契丹が單り強大となつて三勢力の均衡が破れた時、忽ちその手によつて國命を絶たれたのは、結局、遼東の小國が辿るべき宿命であつたといへるのである。ただかく観ずる時、安史の亂以後、唐の對外勢威が東北面に於いて特に失墜し、次いで廻鶻の潰散後遊牧勢力も亦振はなかつた際、獨り海東の盛國を誇り大繁栄を續けてゐた渤海は遼東に絶對の力をもち、明かに三勢力の均衡を破つてゐたにも拘らず、さうした環境の下で小高句麗が存在を續けたのは何故かという問題が殘される。此の問題は、渤海は容易に滅し得る小高句麗國を何故滅さなかつたのかと云ふ問題に外ならぬ。そしてそれは必ずや色々な要因が絡み合つたものに相違なく、その解決は渤海史の研究から抽き出さるべきものと云はねばならぬが、小高句麗の王室高氏は大高句麗國以来の高氏の嫡統であつたのに對し、渤海の王室大氏は嘗ての大高句麗の隷民粟末靺鞨の出身であり、且つ渤海國の支配階級の主力は高氏の一族で占められてゐたと云ふ事情が大きく関係してゐたことは疑ひあるまい。いはば渤海は小高句麗王室の抹殺を憚つたと考へられるのである。然し王室を倒さなかつた渤海もその領域に對する支配に就いては些かも遠慮せず、三勢力の均衡喪失が渤海の有利な方向に決定するに従つて宗主權を強め、事實上直轄領土と変らぬ支配を振つてゐる。即ち小高句麗國の存在を名義的に止め、一國の實權を完全に取上げて隣接諸國にも渤海の一部として受取らしめてゐた。渤海の遼東制覇と共に小高句麗國の實體は無きも同然となつてゐたのである。結局、小高句麗國はその宿命の命運を宿命のままに歩み續けて二百二十年の生涯を閉じたものと云ふことができる。

註

332 滿鮮地理歴史研究報告第一六冊所載、池内博士「高句麗討滅の役に於ける唐軍の行動」。

333 遼史に於いては大渤海國を指す渤海、渤海人を云ふ渤海等も並び用ひられ、「渤海即小高句麗」に限定せられてゐるのではないこと、先に一言した如くである。

334 遼州の乱に就いては後文に詳述する。

335 元苑州・瀋州等。尚他にもかなりの州縣があつた。

336 小高句麗國内に於ける渤海の州縣開置は小高句麗國の州縣制の問題として別に考究する必要がある。

337 中國が異民族を羈縻した場合、その異民族の中に州縣を置くことが殆んど慣例に近く、四邊の地に普く行はれてゐる。例へば大唐の盛時に於ける羈縻地の府州総数は、新唐書巻四三下羈縻州序文に依れば、八百五十六に達したと云ふ。然し中国が異民族の間に置いた羈縻州は形式的な名義上のもので、大抵その土民の酋長を州の刺史に任じて自治に委ね、部内の統治に直接介入することは殆んどなく、せいぜい彼等の謀反を監視するか、異民族同士の攻争を見張る為の少数漢人を派遣する程度に止まつてゐた。羈縻州の域内を宗主國としての唐が自ら開発経営することは、非常屯軍でもない限り、先づなかつたといつて差支へない。渤海が小高句麗領内に行つた如き開発経営の例は少い様に思はれる。

338 渤海國志長編巻三世紀、同書巻五年表、同書巻八大事表等に拠る。

339 遼・銀・同・巖四州の年次は所伝を欠き、推定も複雑となるので表から一応省略した。本文後述の部分に論及してゐる。

340 同博士著「満鮮史研究・中世第一冊」所収、「鐵利考」第三「遼代の鐵利」の項。

341 帝國学院記事第二巻第三號掲載の拙稿「後渤海の建国」、東洋史学第一輯乃至第三輯連載の拙稿「定安國考」第一章建國篇第一節「鴨緑府の大光顕政権」等参照。

342 幽・鎮・定・魏・淄の五節度使をそれぞれ一個の政治勢力として扱つてゐるのは、これらの諸藩が唐室の滅亡を機に一時独立態勢を張つてゐたからである。幽州藩は時に河東に拠る晋の李存勗の勢力が加はつて、新に周德威が節度使に任ぜられてゐたが、その直前迄は劉氏が藩封を世襲して燕王を称して居り、鎮州成德軍節度使は王氏が世襲して趙王を称し、既に滅亡してゐた唐の天祐の年號を奉じ、唐臣として新王朝の後梁や後唐には服しない独立の勢力たるたてまへを示してゐた。定州義武軍も王氏（成德の王氏とは別）が世襲し、淄州昭義軍は李存勗の影響下に在つたが、同じ唐の年號を奉じ、魏博天雄軍は楊師厚が後梁の年號を奉じつつも一個の勢力を形成してゐた。

343 前出の津田博士「遼の遼東経略」。尚本稿でも後文に論及してゐる。

344 例へば遼州鎮定の出兵を伝へた資治通鑑の記事の続きに

乃先挙兵擊渤海之遼東。遣其将委餒及盧文進拠営・平等州。以擾燕地。

とある如く、遼東出兵と同時に一部の兵力を以て河北を侵擾しており、又阿保機の大挙西征中に於いても、遼史巻二太祖紀・天贊四年二月乙亥の条に

蕭阿古只略燕趙還。

とある如く、中國の北邊を侵擾してゐる。

345 此の回鶻は女真や黄頭室韋等と連合して契丹の西征軍の留守をねらつた攻勢を仕かけてゐる所から推して甘州等の西方居住の者ではなく、北方に残住し、もしくは室韋の中に遁竄してゐた者であらう。

346 燕頗の叛乱逸走に就いては、史淵四九・五一・五二輯連載の拙稿「渤海の扶余府と契丹の龍州黄龍府」参照。

The Collapse of the Small *Kao-chu-li* Kingdom (小高句麗国)

Kaizaburō HINO

The capital of the Small *Kao-chu-li* Kingdom was *Liao-cheng-zhou* (遼城州), called *Lia-yang* (遼陽) nowadays. The Chitan (契丹) tribe invaded the *Liao-tung* (遼東). It was in the third year of *Chen-ce* (神冊) that *A-pao-chi* (阿保機), leader of the Chitan tribe, occupied this capital. Thereafter the Small *Kao-chu-li* Kingdom collapsed. We cannot say exactly the month of this collapse. But I think it was in some month from February to June 918 A. D.